

帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について

池田 治

1. はじめに

弥生時代には金属器の使用が始まり、特に青銅器は多くの特色ある器種が創られるようになった。弥生時代青銅器の代表は、銅鐸、銅剣、銅鏡が先ず挙げられるであろうが、他にも銅釧、巴形銅器など、極めて特徴的なものも作り出されている。これらの代表的な弥生青銅器だけを見ると、九州から東海地方までの主に西日本にのみ分布しているかのように思われるが、東日本にも独特の青銅器が存在していることが明らかになってきている。中でも「帯状円環型銅釧」などと称される青銅製の腕輪は、静岡県以東の東日本に分布していて、近年発掘資料の増加と共に様々な視点からその特色が論じられるようになってきた（註1）。

本稿では、東日本に特徴的に分布している「帯状円環型銅釧」と呼ばれる青銅製の腕輪について、未だ詳細な比較が行われたことのない断面形状を主とした形態分類を行い、製作工程と形態の対応をもとに型式変化と地域色について論じてみたい。

2. 研究略史

「帯状銅釧」、「板状銅釧」、「帯状円環型銅釧」などと呼称されるこの種の銅釧を最初に報告したのは、八幡一郎である（八幡1928）。長野県田口村（現臼田町）離山遺跡出土品を、腕輪のような装身具と想定しつつも、類品が知られていなかったために古墳出土の銅釧とは区別して「銅環」として報告している。

この後、類品は静岡県静岡市登呂遺跡の発掘調査で円環の一端が切れた銅釧が出土（日本考古学協会1949・1954）し、静岡県菰山町山木遺跡では閉じた円環形を呈する銅釧が出土（山木遺跡発掘調査団1969）しているが、登呂遺跡が呈示した弥生遺跡像の印象の大ききゆえか、その後しばらくの間は、登呂遺跡から出土したタイプの銅釧が東日本の弥生時代銅釧の典型例として考えられ、「薄板を環状に曲げたかんたんなつくりのもの」（坪井清足1960）などと説明されることになった。また小田富士雄は、登呂遺跡出土の銅釧を「幅広い薄板を曲げた鍛造品である」として「登呂型銅釧」と呼び、系譜をイモガイ横切貝輪系と想定している（小田1974）。この時点で小田は、銅製の類品が見あたらないとしていて、登呂遺跡出土品だけを対象としている。

こののち1986年には埋蔵文化財研究会の研究集会に伴って弥生時代青銅器の集成が行われ（埋蔵文化財研究会1986）、東日本の青銅器についても特色が知られるようになり、1989年には井上洋一が弥生時代の銅釧についてまとめている。井上は、弥生時代の銅釧は「A 铸造品」と「B 曲げ輪造りの製品」とに大きく二分できるとし、B類を「銅板を単にまるめ円環をつくったもの」とであるとして「帯状円環型銅釧」とした。分布図を示しており、この図に示された遺跡の銅釧をみると、B類に含まれる銅釧は円環の一箇所が切れているものと閉じた円環のものとの両者を含んでいる。また系譜について小田の言うイモガイ横型貝輪の系譜の他に、分布が東日本に偏ってみられることから縄文系の二枚貝貝輪から変化した可能性もあると述べている（井上1989）。

ここまでの研究は、弥生時代の銅釧全体の中での東日本に特有の銅釧を述べているに過ぎなかったのでは

るが、出土事例の増加とともに報告書において細かい特徴が観察されるようになり、最近では東日本の銅釧を対象とした研究が行われるようになってきた。

小高幸男は千葉県君津市マミヤク遺跡出土青銅製品をもとに形態的特徴を細かく観察し、銅釧の外面角に面取りがあることを指摘している（小高1989）。

黒沢浩は東京都狛江市弁財天池遺跡出土銅釧の報告において、銅釧の側縁角に（鑄バリ状の）弱い突出がみられることを指摘し、これらの銅釧は「扁平な銅板を曲げてその両端を「鑄掛け」状に貼りあわせたもの」で、側縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）（註2）。

中村勉は、東日本に特徴的な銅環と呼ばれる青銅器全般について、分類、分布、性格、系譜を考察している（中村2001）。中村は、「銅環」の大型品（腕輪）と小型品（指輪）に共通する特徴として「分布が東日本に限られていること、またその造りが一部に鑄造でなく鍛造のものもありまた青銅製板を曲げて環状にし、製品化している」点を挙げており、「鍛造」の製品もあると考えている。銅環の分類は数少ない完形品を参考に、銅環を環の直径の大きさによってA類（5～7 cm）、B類（1.5～3 cm）に二分している。一般的に腕輪とされる銅環A類は三分類しているが、造りの上で鑄造品と鍛造品との二種類に分けられるとしている。また、指輪ともいわれる銅環B類は、形態的に三分類しているが「つくりは「曲げ輪造り」によるもので、使用される板状帯の形態は、銅環A類のものとはほぼ変わらない」という。

野澤誠一は、佐久市上直路遺跡出土銅釧の復元複製製作の報告を兼ねて、弥生時代後期の東日本に分布する銅釧・鉄釧の製作技法が独特のものである可能性を示し、金属製釧の役割と東日本の弥生社会の独自性を論じている（野澤2002）（註3）。野澤の形態分類は、東日本の銅釧の特徴として断面が扁平な長方形であることから、有鉤銅釧や楽浪系銅釧と区別して「带状銅釧」とした上で、完形品で閉じた円環状のものを「円環型」、完形品を切断して開いた円環状になったものを「断環型」として区分した。また断環型を曲げ直して小さくなったものを「小銅環」としている。

これまでの带状円環型銅釧の研究は、巻き貝輪系銅釧や楽浪系円環型銅釧の研究の中で対比され言及された研究から、東日本に分布する带状円環型銅釧を直接研究するという段階へ移ってきているが、なお細かい形態分類には十分に踏み込んでいないと言って過言ではないであろう。

3. 带状円環型銅釧の分類

本稿で対象とする銅釧は、弥生時代銅釧の分類としては井上の「B類（曲げ輪造り）—带状円環型銅釧」に該当するのであるが、筆者はB類銅釧も基本的には円環形に鑄造されたものであり、曲げ輪造りの銅釧は例外的に存在するが、それは再加工作品として位置付けるほうが妥当ではないかと思っている（註4）。

ここでは断面形が扁平な長方形または薄板状で全体形が円環形を呈する銅釧を「带状円環型銅釧」とし、円環の一箇所が途切れた状態で使用されているものを野澤に準拠して「断環型」と呼ぶことにする。両者を包括した呼称として「带状銅釧」を使用する。

その上で、本稿では带状銅釧を観察した結果に基づいて、断面形状をつぎのように分類する。分類基準は断面の形状に沿って示しているが、分類の意図は、銅釧として仕上げるための加工がどれだけ加えられているか（手抜きされているか）によって、型式変化の方向を見いだそうとするものである。

以下に分類基準と模式図を示す。

分類基準

I 類＝断面形が長方形を呈し、上下両端に平坦面があるもの。断面形の角の微細形状（仕上げ具合）によって4細分する。

I a 類：銅釧内面の上下端に内側へ捲れたりはみ出すような弱い突出が存在し、且つ外面の上下端にも外側へ捲れたりはみ出すような弱い突出が見られるもの。

I b 類：I a 類と同様に銅釧内面の上下端に内側へ弱い突出が見られるが、外面側には見られないもの。

I c 類：断面の四隅とも角が明瞭であるが、捲れるような弱い突出は見られないもの。

I d 類：断面の四隅もしくは外面側の角が丸味を持って滑らかに仕上げられているもの。

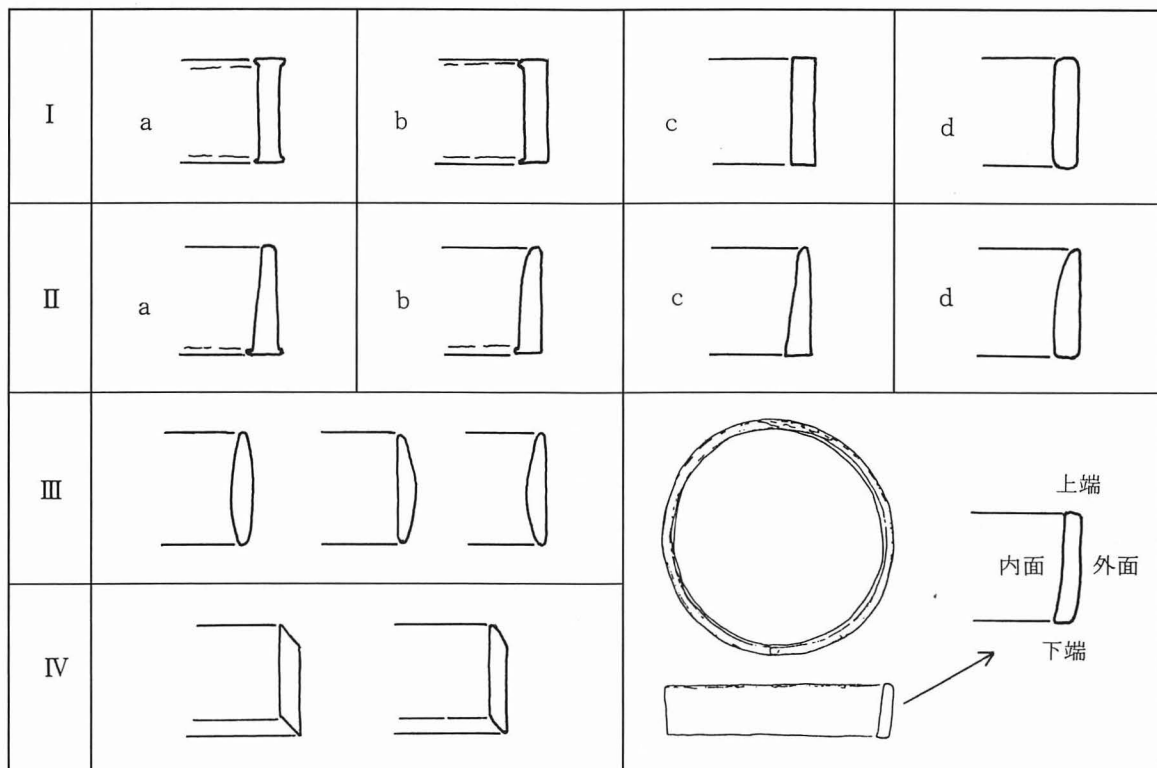
II 類＝断面形が台形もしくは楔形を呈するもの。上下いずれかの端部に平坦面を有し、もう一方の端部は磨き込まれて薄く仕上げられる。薄い端部の平坦面の有無と磨きが内外両面か一方だけかという違いが存在するが、ここでは区分しない。幅広い平坦面の角に突出があるかないかによって2分する。

II a 類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出があるもの。

II b 類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出が見られないもの。

III 類＝断面の上下両端が磨き込まれて薄く仕上げられ、断面形が薄い板状もしくは薄い蒲鉾状になるもの。内外両面が磨き込まれるものと内外面のいずれかが磨き込まれもう一方は直線的なものがあるが、今回は区分しない。

IV 類＝断面の上下端面が内削ぎ状もしくは外削ぎ状に面取りされているもの。面取りされた傾斜面がやや丸味を持つものもあるが一括する。面取りが両端にあるものと一方だけにあるものがあるが、ここでは区分しない。両端に面取りがされるものはほとんどが、一方が内傾面、もう一方が外傾面となる。面取りが内傾面か外傾面かの違いは、両者が互いに組み合わせるものなので区分しない。



第1図 銅釧断面形分類模式図

4. 各遺跡出土銅釧の特徴

上記の分類に基づき、腕輪としての組み合わせが分かる事例を中心に、個別の特徴を確認しておこう。完形もしくは準完形の帯状円環型銅釧が出土している遺跡は33遺跡が知られているが（第2図）、未報告の資料もあるため、報告書から特徴が判断できるものと筆者が観察し得たものを取り上げることとする。

なお、文中および集成図の遺跡番号は分布図の遺跡番号および文末の遺跡文献一覧と対応し、遺物番号は各遺跡の報告の番号を踏襲している。報告時に番号が付されていないものには、適宜番号を付けた。

（2）如仲庵遺跡

遺構は発見されていないが、帯状円環型銅釧6点がまとまって出土している。継ぎ目が見られないということから全て鑄造品と考えられる。3～5は内外面とも磨かれ、6～8は鑄造時の凹凸が残っているという。いずれも断面の一端が尖るように作られており、Ⅱd類（3～5）とⅡc類（6～8）で構成される。

（4）賤機山古墳下層遺跡

弥生時代後期の墓坑と考えられる土坑から帯状円環型銅釧6点が出土している。6点ともやや歪んでいるが正円に直すと直径6.2～6.3cmになる。幅は12.5mm前後で揃っているが、厚さは上端が1.7mm前後、下端が2.4mm前後を測り、断面形は長方形か台形を呈している。いずれも内外面および端面は研磨されていて、1～4は一方の端部がやや薄くなっているが断面形はほぼ長方形であって断面分類はⅠc類、釧5・6は明らかに一端が薄くなっていて断面形は台形に近く、断面分類はⅡc類である。厚みある端部の方が直径が小さく、薄い端部の方が直径が若干大きい。帯状円環型銅釧の中では大型の部類に属する。いずれの銅釧も合わせ目は認められず鑄造品である（註5）。6連一組と考えられ、Ⅰc類とⅡc類で構成されている。

（5）登呂遺跡

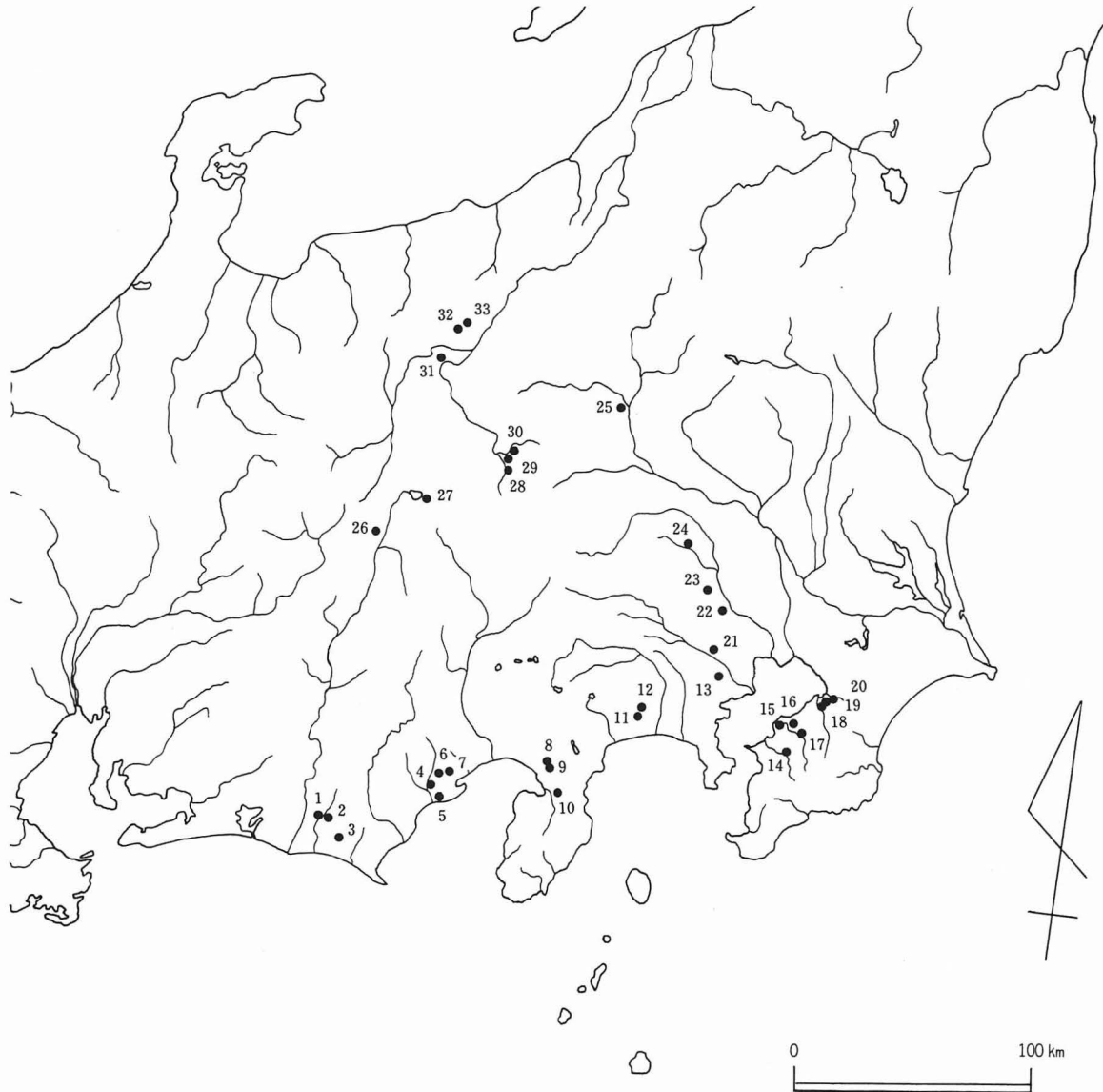
1947年と1948年の調査で断環型の帯状銅釧2点、破片8点、小銅環4点が出土し、1999年から2001年の再整備に伴う調査では断環型の帯状銅釧1点、破片1点、小銅環1点、有鉤銅釧片1点が出土している。墓坑から出土したものはない。

1947年調査の1（『登呂 前編』図版63-4）は、破断部分両端の形状がほぼ同じであり、一周した円環型であったものを断ち切った状態と思われる。断面形は長方形で上下両端に平坦面があり、角はやや丸味がある。Ⅰd類である。2の破断部分両端は鋭利な面となっていて、外面側から鑿等の刃物で切断されたものと思われる（註6）。断面形は一端が厚い台形を呈し、上下両端には平坦面がある。断面分類はⅡc類である。再整備に伴う調査で出土した断環型の帯状銅釧は大きく歪んでいて一端が開いているが、破断部分両端は形状が似ていて接合するのではないかとと思われる。断面形は角に丸味のある長方形を呈する。断面分類はⅠd類である。登呂遺跡出土の青銅製品は地下水位が高い状態にあるためか腐蝕があまり進行しておらず、いずれも保存状態が良い。破片資料も含めて銅釧表面は内外面とも丁寧に磨かれている。

（11）原口遺跡

第1号方形周溝墓の主体部からはほぼ完形に復元される帯状円環型銅釧が2点、Y H34号竪穴住居址の覆土から帯状円環型銅釧の完形品が1点、Y H60号竪穴住居址の覆土から帯状銅釧の約1/2破片が1点出土している。またY H38号竪穴住居址の覆土から帯状銅釧の破片が出土している。

Y H34号竪穴住居址の銅釧は、直径5.9cm～6.2cmでほぼ正円に近く、幅は1.36cm～1.38cm、内面が研磨されていて、一端はやや薄くなっている。上端の厚さは2.2mm～2.5mm、下端の厚さは1.5mm～1.8mmで、断面は楔形を呈し、外面側はほぼ垂直なのに対して内面側はわずかにカーブを描きながら下方が細くなっている。



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 静岡県森町 文殊堂古墳群下層 | 18 千葉県市原市 根田遺跡 |
| 2 静岡県森町 如仲庵遺跡 | 19 千葉県市原市 長平台遺跡 |
| 3 静岡県掛川市 梅橋北遺跡 | 20 千葉県市原市 草刈遺跡H区 |
| 4 静岡県静岡市 賤機山古墳下層 | 21 東京都狛江市 弁財天池遺跡 |
| 5 静岡県静岡市 登呂遺跡 | 22 埼玉県朝霞市 向山遺跡 |
| 6 静岡県静岡市 川合遺跡 | 23 埼玉県川越市 霞ヶ関遺跡 |
| 7 静岡県静岡市 瀬名遺跡 | 24 埼玉県東松山市 観音寺遺跡 |
| 8 静岡県三島市 中島西原田遺跡 | 25 群馬県渋川市 有馬遺跡 |
| 9 静岡県三島市 鶴喰前田遺跡 | 26 長野県南箕輪村 北高根A遺跡 |
| 10 静岡県菰山町 山木遺跡 | 27 長野県茅野市 家下遺跡 |
| 11 神奈川県平塚市 原口遺跡 | 28 長野県白田町 離山遺跡 |
| 12 神奈川県平塚市 真田・北金目遺跡群 | 29 長野県佐久市 五里田遺跡 |
| 13 神奈川県横浜市 関耕地遺跡 | 30 長野県佐久市 上直路遺跡 |
| 14 千葉県君津市 大井戸八木遺跡 | 31 長野県長野市 篠ノ井遺跡群 |
| 15 千葉県木更津市 高砂遺跡 | 32 長野県長野市 本村東沖遺跡 |
| 16 千葉県袖ヶ浦市 文脇遺跡 | 33 長野県長野市 檀田遺跡 |
| 17 千葉県袖ヶ浦市 荒久遺跡 | |

第2図 带状円環型銅釧（完形品）出土遺跡分布図

上端には明瞭な面があつて、内面上端は尖り気味の強い角がある。下端は狭い面を有している。断面形による分類はⅡc類である。表面の状態は、内外面ともに滑らかである。継ぎ目のない鑄造品であり、X線透過写真撮影を行った結果も接合部と見られる部分は認められなかった。完形品であり、保存処理後の現重量は32.4gを測る。帯状円環型銅釧としては大型の部類である。

第1号方形周溝墓の主体部からは2点出土していて、3は下端に丸味のあるわずかな面があり、上方に向かって次第に細くなり、上端は尖っている。もう1点の4は、下端に明瞭な平坦面があつてその外面端部は角があり、内面端部は内側へ向かつて弱い突出が見られる。断面の外側は直線的であるが、内面の上半は研磨され上端は尖っている。断面分類は3がⅢ類、4がⅡb類である。

(12) 真田・北金目遺跡群

銅釧、小銅環、再加工作品等の青銅製品は、破片を含めると多数出土している（註7）。3連の帯状円環型銅釧が、方形周溝墓の周溝内土坑から出土している。錆が著しいが欠損は少なく原形を良好に保っている。3連のうち中央に挟まれる銅釧は、断面形が長方形を呈し、角の一部に弱い突出があるⅠa類である。3連の両端の銅釧は、断面形が楔形を呈し、他の釧と接する側の端部に平坦面を有し、もう一端は内面が徐々に薄くなって先端が丸くなる形状を呈する。このうちの1点には、平坦面の内面側角に、部分的ではあるが捲れるような弱い突出が観察される。Ⅱb類とⅡc類である。

(14) 大井戸八木遺跡

古墳墳丘下から発見された2基の土壌のうち、001号土壌から小銅鐸、玉類と共に4連の帯状銅釧が出土している。4連の銅釧のうち3点は継ぎ目のない円環型であるが、1点は断環型であり、切れ目の両端部に孔が穿たれ紐で結んだ痕跡が残っている。円環型の3点はⅡc類2点、Ⅲ類1点である（註8）。

千葉県木更津市 高砂遺跡〔15〕

SZ022から帯状円環型銅釧6点、SZ039から銅釧破片1点、SZ043から銅釧破片1点が出土している。SZ022では周溝内埋葬施設から帯状円環型銅釧6点が連なって出土した。1は一部を欠損するが2～6は完形品である。継ぎ目が認められないことから鑄造品と考えられている。4はⅠd類、1と6はⅡc類、その他の3点はⅡd類である。

(17) 荒久遺跡

008方形周溝墓の埋葬施設主体部から、ガラス小玉と共に銅釧が出土している。銅釧は破損した状態で出土したが、5個の釧であったと考えられている。復元できた2個体は、端部が斜めに削がれたように面取り整形されている。接合部が見られないので鑄造されたものと考えられている。報告の1は2個体が連結したままであり、Ⅳ類である。この他にはⅠd類、Ⅱb類がある。周溝から久ヶ原式土器の壺、鉢、甕が出土していて、後期初頭に位置付けられている。

(18) 根田遺跡

2基の方形周溝墓の主体部から、それぞれ5連の帯状円環型銅釧が、腕に装着した状態で骨と共に出土している。年報に記載された報告（米田1986）に拠ると、それぞれ組み合わせる5点は似た大きさを示している。これらの銅釧には、つなぎ目等が一切見られず、大きさも均一なことから鑄造された可能性が高い。

観察の結果、銅釧Aの5点はいずれも断面の一端が内削ぎ状に面取りされた内傾面をもち、他の一端が外削ぎ状に面取りされた外傾面をもつⅣ類であり、隣り合う銅釧の内傾面と外傾面が嵌り合うように作られている。銅釧Bの5点は全て断面の一端に平坦面を有し、他の一端が先細りになる楔形を呈するⅡc類で揃え

られている（註9）。

(21) 弁財天池遺跡

1号方形周溝墓の第2主体部とされる土坑（註10）から、腕に装着された状態で人骨とともに带状円環型銅釧が6点出土している。6点のうち3点は完形であり、1点は一部欠損、2点は1/2～1/3が欠損している。9がほぼ正円に近いが、他はやや歪んでいる。断面形は長方形を呈するものと、一端が薄くなって台形状を呈するものがある。8～12の断面形は基本的には長方形を呈するが、詳細に観察すると側縁の上下両端（断面の四隅）が内側および外側に向かって捲れるようにわずかに突出していて（註11）、断面形がローマ数字の「I」字状になっていることが判る。断面形の分類は7がⅡc類で8がⅡa類、その他の4点はⅠa類である。使用の組合せとしては、Ⅱ類の2点が6連の両端、Ⅰa類の4点がⅡ類に挟まれて使われていたであろうと推測される。これらは铸造品で、製作時の貼りあわせ痕は認められない。

(29) 五里田遺跡

第2号円形周溝墓の主体部墓壇から带状円環型銅釧5個体が出土している。いずれも铸造品である。9～12は断面形が長方形の板状を呈し、上下両端に平坦面がある。内面側の上下両端は内側へ向かって弱い突出があり、外面側には突出はない。外面は滑らかに仕上げられているが、内面は荒れた感じがあり、鑄放しであると思われる。13は現状では断面形が楔形の図であるが、腐蝕によって一端が薄くなっているものであり、本来は9～12と同様であったと考えられる。断面分類はいずれもⅠb類である。

(30) 上直路遺跡

弥生時代後期後半の第1号住居址内に掘られた墓壇から、人骨とともに腕に装着された状態で带状円環型銅釧が出土している。欠損品もあり正確な個体数は分からないが、14～15個体があったと考えられている。出土位置から1～5は右腕、6～13が左腕に装着されたものとされる。4・5と6～11は連なって出土し、その状態のまま保存処理されている。完形の銅釧はいずれも繋ぎ目のない铸造品である。個々の状態が良好なのは1～5であるが、観察に耐えられる状態にある9点を観察した。

観察した9点のうち、1、2、5、12、15は、内面側の上下両端に弱い突出が認められるが、外面側は角が明瞭であるが突出は認められない。Ⅰb類である。内面は铸造時のままとされる凹凸があるが、外面は凹凸がなく磨いてあるようである。3、13は内面も外面も研磨されず無調整のようである。上下両端ともに内面側と外面側に弱い突出が認められるⅠa類である。4と14は一端の内外面が研磨されて先細りになり、もう一端は平坦面を有し内面側に弱い突出が認められるⅡb類である。

1～5で一組、6～13で一組となるのであるが、両組ともⅠ類を主とする中にⅡ類が1点ばかり組み込まれるという構成である。

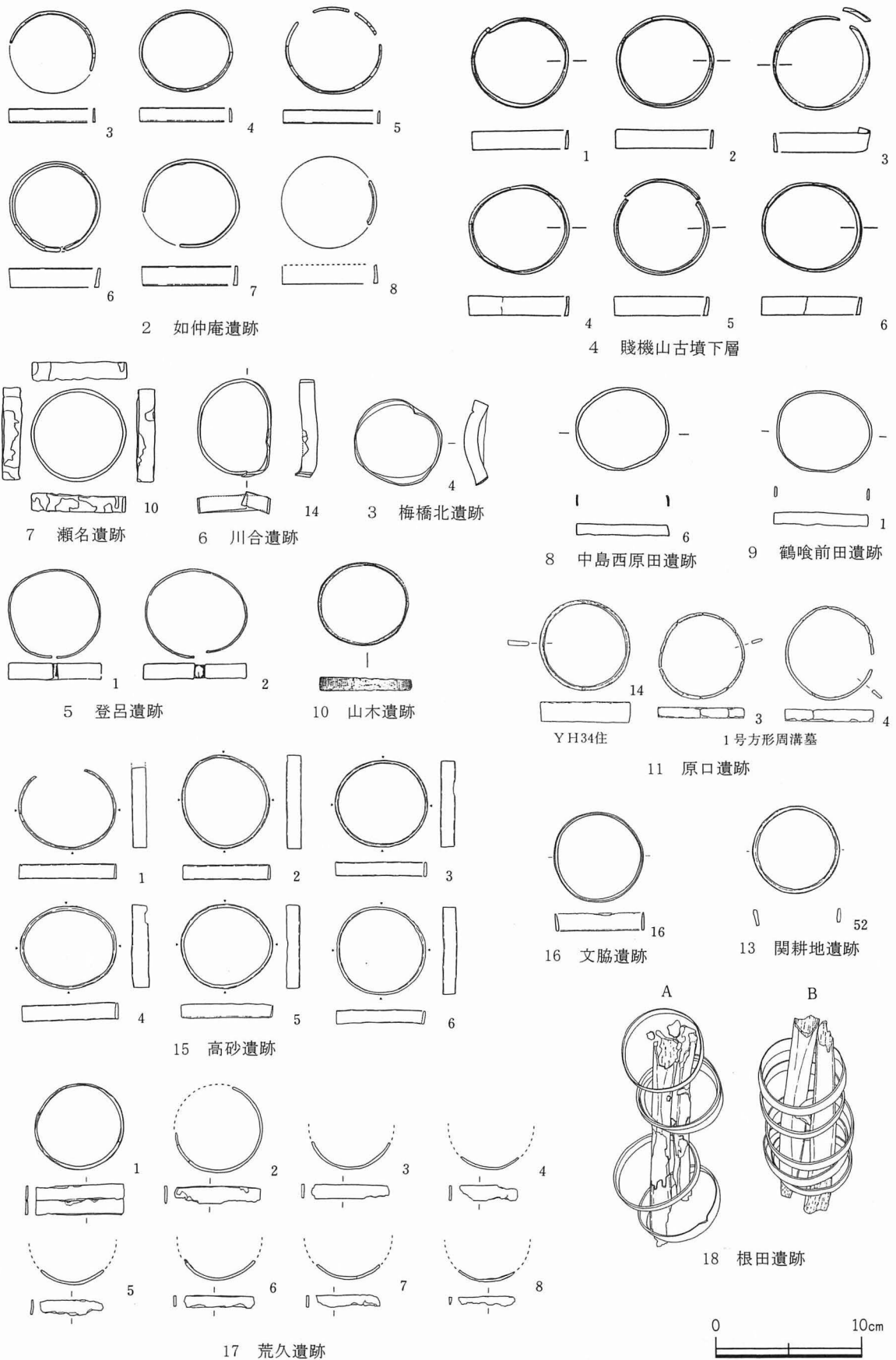
(31) 篠ノ井遺跡群

土坟墓と思われるSB217（箱清水期）から2点、竪穴住居址SB374の覆土中から1点、円形周溝墓SM213の主体部から1点が出土している。いずれも断環型銅釧である。

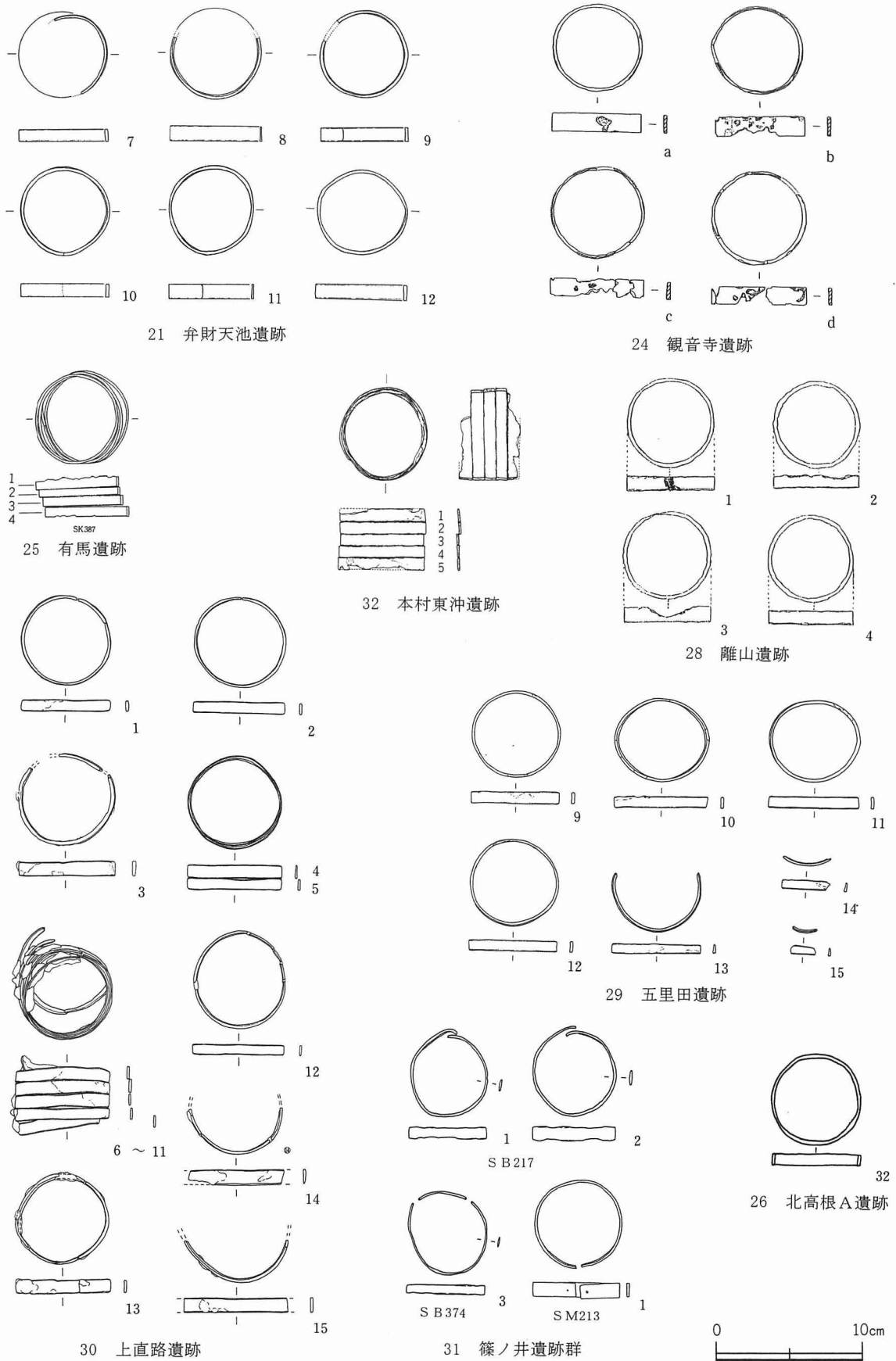
SB217の1は上下の端部が大部分欠損していて、断面形の詳細は不明である。2は一端が内面研磨により先細りになるⅡ類で、もう一方の端部は全周欠損しているため不明である。円環が切れている部分は内側へ折れ曲がっていて、外側から鑿で叩いて断ち切ったように観察される。

SB374出土の3は全体的に薄く仕上げられていて、断面形は両端が細く尖るⅢ類である。

円形周溝墓SM213の主体部出土の銅釧は、円環の一箇所が離れている断環型で、切断部の形状は一致して



第3図 带状円環形銅釧集成図1 (静岡・神奈川・千葉)



第4図 带状円環型銅釧集成図2 (静岡・神奈川・千葉)

第1表 銅釧分類一覧表

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ia	Ib	Ic	Id	IIa	IIb	IIc	IId	III	IV	断環	備考
静：森町	1	文殊堂古墳群下層														未報告
静：森町	2	如仲庵遺跡	土壌？	3								○				
		〃	〃	4								○				
		〃	〃	5								○				
		〃	〃	6							○					
		〃	〃	7							○					
		〃	〃	8							○					先端欠
静：掛川市	3	梅橋北遺跡	自然流路	4									○			
静：静岡市	4	賤機山古墳下層	土壌	1			○									
		〃	〃	2			○									
		〃	〃	3			○									
		〃	〃	4			○									
		〃	〃	5							○					
		〃	〃	6							○					
静：静岡市	5	登呂遺跡	包含層	1				○							○	
		〃	〃	2							○				○	
		〃	(再整備調査)					○							○	未報告
静：静岡市	6	川合遺跡	包含層	14				○							○	
静：静岡市	7	瀬名遺跡	包含層	10										?		
静：三島市	8	中島西原田遺跡	旧河川	6									○			
静：三島市	9	鶴喰前田遺跡	包含層	1								○				
静：菰山町	10	山木遺跡	包含層	1												断面不詳
神：平塚市	11	原口遺跡	YH34号住居址	14							○					
		〃	1号方形周溝墓	3									○			
		〃	〃	4						○						
神：平塚市	12	真田・北金目遺跡群	方形周溝墓	1						○						未報告
		〃	〃	2	○											
		〃	〃	3							○					
神：横浜市	13	閑耕地遺跡	6号住居址	52				○								
千：君津市	14	大井戸八木遺跡	001号土壌	1							○					未報告
		〃	〃	2									○			
		〃	〃	3									○		○	
		〃	〃	4							○					
千：木更津市	15	高砂遺跡	SZ022	1							○					
		〃	〃	2								○				
		〃	〃	3								○				
		〃	〃	4				○								
		〃	〃	5								○				
		〃	〃	6							○					
千：袖ヶ浦市	16	文脇遺跡	215号住居址	16								○				
千：袖ヶ浦市	17	荒久遺跡	008方形周溝墓	1										○		
		〃	〃	1										○		
		〃	〃	2							○					
		〃	〃	3				○								
千：市原市	18	根田遺跡	A(方形周溝墓)	1										○		
		〃	〃	2										○		
		〃	〃	3										○		
		〃	〃	4										○		
		〃	〃	5										○		
		〃	B(方形周溝墓)	1							○					
		〃	〃	2							○					
		〃	〃	3							○					
		〃	〃	4							○					
		〃	〃	5							○					
千：市原市	19	長平台遺跡														未報告
千：市原市	20	草刈遺跡H区												○		未報告
東：狛江市	21	弁財天池遺跡	1号方形周溝墓	7							○					
		〃	〃	8					○							
		〃	〃	9	○											
		〃	〃	10	○											
		〃	〃	11	○											
		〃	〃	12	○											
埼：朝霞市	22	向山遺跡														未報告

銅釧分類一覧表（2）

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ia	Ib	Ic	Id	IIa	IIb	IIc	IId	III	IV	断環	備考
埴：川越市	23	霞ヶ関遺跡														未報告
埴：東松山市	24	観音寺遺跡	4号方形周溝墓	a			○									
		〃	〃	b			○									
		〃	〃	c			○									
		〃	〃	d			○									
群：渋川市	25	有馬遺跡	7号墓SK387	1				○								
		〃	〃	2				○								
		〃	〃	3				○								
		〃	〃	4				○								
長：南箕輪村	26	北高根A遺跡	包含層	32			○									
長：茅野市	27	家下遺跡														未報告
長：白田町	28	離山遺跡	土坑？	1												断面不詳
		〃	〃	2												
		〃	〃	3												
		〃	〃	4												
長：佐久市	29	五里田遺跡	2号円形周溝墓	9		○										
		〃	〃	10		○										
		〃	〃	11		○										
		〃	〃	12		○										
		〃	〃	13		○										
長：佐久市	30	上直路遺跡	1号住居址内土坑	1		○										
		〃	〃	2		○										
		〃	〃	3	○											
		〃	〃	4					○							
		〃	〃	5		○										
		〃	〃	6-11												I 類
		〃	〃	12		○										
		〃	〃	13	○											
		〃	〃	14					○							
		〃	〃	15		○										
長：長野市	31	篠ノ井遺跡群	土坑SB217	1											○	I 類？
		〃	〃	1											○	II 類？
		〃	住居址SB374	2									○		？	
		〃	円形周溝墓SM213	1	○										○	
長：長野市	32	本村東沖遺跡	SK3	1					○							
		〃	〃	2	○											
		〃	〃	3	○											
		〃	〃	4	○											
		〃	〃	5	○											
長：長野市	33	檀田遺跡														未報告

※出典は本文末の遺跡文献一覧を参照のこと。遺跡番号は分布図・遺跡文献一覧と対応。

いない。内面側の切断部脇には、切断部に並行して鑿痕が残っている。切断された両端部には内側から円孔が穿たれていて、孔の外側の縁には捲れるような弱い突出が認められる。断面形は長方形を呈し、内外面ともに上下端には弱い突出が認められる I a 類である。なお、本例に見られる円孔周辺の捲れるような弱い突出は、環体上下端に観察される「捲れるような弱い突出」と同様のものであり、形成の原因を推測できる資料である。

(32) 本村東沖遺跡

隅丸長方形の土坑 S K 3 から、管玉、ガラス玉、鉄鏃とともに带状円環型銅釧 5 個が重なった状態で出土している。5 連の銅釧のうち、内側に位置する 2～4 の銅釧はいずれも両側に他の銅釧が接する関係にあるのであるが、全て断面形が長方形を呈し、四隅の角には内面側および外面側へ捲れるような弱い突出が見られる。5 連の銅釧の両端にあたる 1 と 5 は断面形が先細りの楔形を呈し、それぞれ他の銅釧と接する方の端部には平坦面があって、2～4 と同様に内外両方の角には捲れるような弱い突出が見られる。断面形の分類

は、1と5がⅡa類、2～4がⅠa類である。4の外面には、鑄バリを切り落とした際の失敗傷かと思われる鑿痕のような鋭い抉れが1箇所認められる。5連で出土した状態のままで保存処理されている。1と5は腐蝕による欠損が著しい。

この5連の銅釧に顕著に認められる特徴は、一組になる組合せの両端にある釧は端部側が先細りに磨き上げられ、互いに接する銅釧の端部は内外面の角に見られる「弱い突出」を残したままで、研磨仕上げを行っていないという点にある。

5. 型式分布と地域的特色

帯状円環型銅釧の分布は、現在知られているところでは天竜川流域より東で、利根川（江戸川）を越えてはいない（第2図）。現在の行政区分では、静岡県、神奈川県、千葉県、東京都、埼玉県、群馬県、長野県の1都6県に及んでいて、分布に粗密があることは既に指摘されているところである（臼居2000、野澤2002）。

ここまで各遺跡出土銅釧の特徴を見てきたが、銅釧が腕輪として着装されている事例は、基本的に複数の銅釧を連結して一組の腕輪としていることが墓坑出土例から分かる。そこでまず、型式の組合せを確認しておこう（第1表）。

太平洋沿岸の遺跡では、如仲庵遺跡、賤機山古墳下層、高砂遺跡などのようにⅠc・Ⅰd類とⅡc・Ⅱd類が組合うものも多く、大井戸八木遺跡のようにⅡc類とⅢ類が組合わさっているものもある。中には真田・北金目遺跡群のようにⅠa類とⅡb・Ⅱc類が組み合う中部高地的な特徴（後述）を持つ例もごくわずかではあるが存在する。真田・北金目遺跡群の例を除いて、この地域は全般的に丁寧に磨くという特徴がある。

千葉県の東京湾沿岸地域では、端部を斜め面取りするⅣ類を中心に構成される銅釧が3遺跡で見られ、この地域の強い特色となっている。Ⅳ類以外では、Ⅱc類のみで構成される根田遺跡Bなど、やはり良く磨かれたものが見られる。

中部高地では、長野県の千曲川流域に強い特色が見られる。五里田遺跡や本村東沖遺跡に代表されるように、Ⅰa類もしくはⅠb類で構成され、Ⅱa類が加わる場合があるというものである。Ⅲ類やⅡd類のような磨き込んだものはほとんど見られない。

静岡県の太平洋沿岸、千葉県の東京湾沿岸、長野県の千曲川流域の3地域が帯状銅釧の分布の中心とされてきたのであるが、上述のように形態的にもそれぞれ特色のある3地域であることが明らかになった。

それではこれらの中間に位置する地域ではどうであろうか。

多摩川流域の弁財天池遺跡では、Ⅰa類が主体でⅡa・Ⅱc類が加わる中部高地的な構成を示しているが、出土土器も中部高地系の朝光寺原式土器が主体であるので、特に齟齬はない。

荒川流域の観音寺遺跡はⅠc類、利根川上流域の有馬遺跡はⅠd類でそれぞれ構成される組合せであり、隣接地域である中部高地とはやや異なった様相を持つと言えよう。この地域は、もう少し類例が増えることを待つ必要があろう。

型式の組合せとしては、Ⅰ類のみ、Ⅱ類のみ、Ⅳ類のみ、といったような構成もあるが、またⅠ類とⅡ類が組み合わさるようなことは、ごく普通のことであることも分かった。連結したまま出土した本村東沖遺跡などの例から判断すると、連結した釧の両端に一端を薄く磨いたⅡ類を配置し、これらに挟まれた間にⅠ類を置くという並びで着装されるようである。そうすると、Ⅰ類とⅡ類の関係としては、細分項目のa、b、

c、dによる分類が関わるようである。Ⅰ類がa・bならば、同時に組合わさるⅡ類もa・bであることが多く、Ⅰ類がc・dならば組合わさるⅡ類もc・dということである。

6. 仕上げ加工の省略と型式変化

带状円環型銅釧のⅠa類とⅠb類およびⅡa類とⅡb類に見られる「捲れるような弱い突出」は、どのようにして生じるのであろうか。弁財天池遺跡の報告で黒沢浩が述べているように（黒沢1992）、この突出は装飾のように意図して残されたものではないようである。黒沢は、銅釧を研磨する際に生じたものと想定した。これとは違って、このような突出が鑄型の合わせ目に生じる「鑄バリ」の痕跡と考えて、野澤誠一は鑄型の形態を復元し鑄造実験を行った（野澤2002）。実験の結果は概ね良好で、仕上げに研磨すると金属光沢が生じるという。しかしながら鑄バリ痕が残っているということは、研磨していないということである。

銅釧および小銅環などの加工痕跡を観察すると、この「捲れるような弱い突出」と同様の痕跡が、断環型銅釧や小銅環、垂飾品に穿たれた円孔の周辺にしばしば見られる。前記した篠ノ井遺跡群S M213出土の断環型銅釧に穿たれた円孔の周辺も、同様の痕跡である。これらから「捲れるような弱い突出」は銅釧の上下端面を研磨し整形する過程で生じたものと考えられる。そして内外面にはみ出したこの突出は、削るとか研磨するといった仕上げを省略しているがゆえに残っていると考えられるのである。

ここでは、この痕跡が残っていることを仕上げ加工の省略、すなわち形態の退化の痕跡と解釈したい。

五里田遺跡や上直路遺跡のⅠb類銅釧にみられるように、「弱い突出」が残されていない外面は磨かれて平滑に仕上げられているのに対して、「弱い突出」が残っている内面は鑄放しと思われる凹凸が観察される。この状況は外面仕上げ研磨を行ったが、内面は仕上げを省略していると言えるであろう。外面も仕上げを省略したものが、Ⅰa類主体の本村東沖遺跡銅釧と言えるのではないだろうか。反対に手を加えて仕上げ加工を入念に行えば、Ⅰc類、Ⅰd類へと変化し仕上ってゆくことになる。

Ⅱ類はⅠ類と同様の仕上げ加工の変遷が想定される。

これに対して、Ⅲ類とⅣ類はⅠ類で示したような変遷とは異なる位置にあると考えられる。Ⅳ類はⅣ類同士で腕輪を構成し、相互の傾斜面が嵌り合って重なるようになるもので、単に複数の釧を接続して着装するというだけではない意図が込められていると考えるべきであろう。带状円環型銅釧も他の銅釧と同様に貝輪の系譜を引いていると仮想すれば、二枚貝貝輪が重なる姿に結びつけることも可能であろうが、系譜の間を埋める資料がない。ただ、型式学的には最も古相を示すと考えて良いのではないか。

Ⅲ類については最も良く磨き込まれた製品とすることもできるが、元々厚いものを磨き込んだとは考えられないので、形態変遷や製作技法については別の視点が必要であるかも知れない。

7. まとめ

再生・再加工による形状変化の可能性を排除するために完形・準完形の带状円環型銅釧を取り上げ、断面形状が仕上げ加工の過程や器種としての祖形を反映している可能性を考慮し、断面形による分類を行って地域色と型式変遷を想定した。

型式変遷について整理すると、最も古い（最も加工の丁寧な）形態から最も新しい（最も省略されている）ものへ、（Ⅰd・Ⅱd）－（Ⅰc・Ⅱc）－（Ⅰb・Ⅱb）－（Ⅰa・Ⅱa）という順が想定される。また最も加工されている形態であるⅣ類は、（Ⅰd・Ⅱd）類以前に位置付けるのが妥当と考えられる。

これらの銅釧は、伴出土器から知られる時期はいずれも弥生時代後期であり、多くが後期後半に置かれる。最も古く位置付けられているのはⅣ類の荒久遺跡であり、後期初頭と報告されている。このことは、推定した変遷の一端を支持するものと思われる。

以上、時期的位置付けなど十分に検討できなかった点も多いが、今後更に検討を重ねて行きたいと思う。

なお、各資料の観察において誤解・誤認があれば全て筆者の責任である。ご指摘、ご批判をいただければ幸いである。

本稿は、平成13年度かながわ考古学財団研究助成制度による研究成果である。

資料の観察・借用・分析にあたって多くの方々のお世話になった。文末ではあるが記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

静岡市教育委員会、静岡市登呂遺跡博物館、三浦市教育委員会、秦野市教育委員会、秦野市桜土手古墳保存館、平塚市真田・北金目遺跡調査会、神奈川県教育委員会、横浜市歴史博物館、（財）君津郡市文化財センター、君津市教育委員会、市原市教育委員会、狛江市教育委員会、佐久市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、長野市教育委員会、（独）奈良文化財研究所、パリノ・サーヴェイ（株）、白居直之、野澤誠一、中村 勉、伊丹 徹、小倉淳一、木對和紀、富沢一明、萱野章宏、中嶋由紀子、大倉 潤、鈴木敏則。

脱稿後、10山木遺跡の第10次・第14次調査で出土した銅釧4点を観察する機会を得た（未報告）。いずれもⅠc類で外面角はやや丸味がある。観察の機会を下さいました韭山町教育委員会山田康雄氏に感謝いたします。

註

1. 銅釧、小銅環（指輪）、小銅鐸、銅鏃、その他単品など、偏った分布傾向を示す種類や独特の形態を持つものが知られている（合田芳正1980、鈴木敏則1986、安藤広道2001など）。
2. この突出が研磨の際に生じたものという考えは首肯できるが、円環形の状態で研磨しても生じるであろう。なお、黒沢が指摘した「鑄掛け」状に貼りあわせた」とされ図示している箇所は、筆者の再観察の結果では、保存処理時の修復痕跡と同一箇所であり、貼りあわせた痕跡はX線透過写真撮影による観察でも存在せず、鑄造品であると考えられる。X線透過写真撮影および修復痕跡の観察にあたって、（独）奈良文化財研究所の高妻洋成氏にご指導いただいた。
3. 野澤論文の最大の特徴は、帯状円環型銅釧の鑄造方法の検討と鑄造実験を行っている点にあり、説得力がある。筆者も帯状円環型銅釧の観察を通して、野澤と同じように、鑄造方法の一つとして組合せ鑄型である可能性が高いと考えているが、鑄バリの痕跡とされる突出をそのまま鑄バリと決定する根拠はないのではないかと思う。なお、野澤は東日本の銅釧・小銅環等と鉄釧の集成を丹念に行っており、今回の検討にあたっても集成の参考とした。また銅釧鑄造方法について色々ご教示いただいた。
4. 「曲げ輪造り」の銅釧とは、青銅製の薄板を鑄造するか他の製品から板状に切り取るかして得た素材を曲げて輪にしたものを言うべきであろう。素材を得るときに元の青銅製品を叩き延ばすことは考えられるが、この作業は「鍛造」と呼ぶべきではなく、再加工である。また、円環型銅釧の一箇所を一度断ち切ったものは、厳密には再利用または再加工であり、曲げ輪造りではない。
5. 鉛同位体比分析が行われていて、分析結果によると古墳時代の鉛同位体比のグループに属すると報告されている（平尾編1999）。

6. この他にも破片資料に、鑿痕と思われる鋭利な条痕が破断面脇に見られるものがある。
7. 発掘調査および整製作業が進められている最中であり、報告書は一部が刊行されている。帯状銅釧、小銅環、帯状銅釧再加工品のほか、有鉤銅釧と思われる破片も出土している。未報告資料であるが、平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により観察させていただいた。
8. 未報告であるが、君津市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。4連の銅釧であるが、作りや大きさが異なる釧を寄せ集めている珍しい例である。
9. 市原市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。また整理を担当されている木對和紀氏には、観察所見についてご教示いただいた。木對氏によると、銅釧Aの形態が重なり合うようになっているのは、貝輪（貝釧）の形態を写していると考えられるということである。魅力的な見解であり、筆者もその可能性は十分に考えられると思う。
10. 第2主体部とされるこの土坑は1号方形周溝墓の周溝外にあり、主軸方向は1号方形周溝墓と揃っているが、1号方形周溝墓とは別の墓である可能性がある。
11. このことは報告書でも指摘されている。また報告書では、これらの銅釧を「扁平な銅板を曲げてその両端を「鑄掛け」状に貼りあわせたもの」で、側縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）。

参考文献

- 安藤広道2001「関東地方における鉄器・青銅器の流れ」『シンポジウム弥生後期のヒトの移動 資料集』西相模考古学研究会
- 井上洋一1989「銅釧」『季刊考古学』27 雄山閣
- 白居直之2000「再生される銅釧—帯状円環型銅釧に関する一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
- 大阪府立弥生文化博物館1994「おくれたきた青銅器」『富士山を望む弥生の国々』大阪府立弥生文化博物館図録8
- 大阪府立弥生文化博物館2001『弥生クロスロード—再考・信濃の農耕社会—』大阪府立弥生文化博物館図録23
- 小田富士雄1974「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5 講談社
- 木下尚子1983「貝輪と銅釧の系譜」『季刊考古学』5 雄山閣
- 黒沢 浩1992「1号方形周溝墓出土銅・鉄剣について」『弁財天池遺跡』狛江市教育委員会
- 合田芳正1980「関東地方の青銅製品について」『考古学雑誌』65-4 日本考古学会
- 小高幸男1989「銅製指輪・腕輪について」『小浜遺跡群Ⅱマミヤク遺跡』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集
- 宍戸信悟1986「神奈川県」『弥生時代の青銅器とその共伴関係 第Ⅲ分冊』埋蔵文化財研究会
- 鈴木敏則1986「静岡県」『弥生時代の青銅器とその共伴関係 第Ⅲ分冊』埋蔵文化財研究会
- 鈴木敏則1987「東海地方の青銅器」『弥生時代の青銅器とその共伴関係—埋蔵文化財研究会第20回研究集会の記録—』埋蔵文化財研究会
- 坪井清足1960「装身具の変遷」『世界考古学大系』2
- 中村 勉2001「銅環と呼ばれる青銅器について—東日本出土の青銅器に関する一つの考察—」『貝塚』56 物質文化研究会
- 野澤誠一2002「銅釧・鉄剣からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号 長野県立歴史館
- 林原利明2001「神奈川県の青銅製品（1）」『西相模考古』第10号 西相模考古学研究会
- 平尾良光編1999『古代青銅の流通と鑄造』
- 埋蔵文化財研究会1986『弥生時代の青銅器とその共伴関係』
- 八幡一郎1928『南佐久郡の考古學的調査』
- 吉田 広2000「朝日遺跡の青銅器生産—青銅器生産の東方展開に占める位置—」『朝日遺跡Ⅳ—新資料館地点の調査—』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集

遺跡文献一覧（番号は遺跡分布図等の遺跡番号に対応）

1. （野澤2002）
2. 森町1998『森町史』
3. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1988『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第14集

4. 静岡市教育委員会1992『国指定史跡 賤機山古墳』静岡市埋蔵文化財発掘調査報告29
5. 静岡市立登呂博物館1989『登呂遺跡出土資料目録 写真編』
日本考古学協会1949『登呂 前編』
日本考古学協会1954『登呂 本編』
静岡市教育委員会2001『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査概要報告書Ⅱ』
6. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1991『川合遺跡遺物編2(石製品・金属製品図版編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第32集
7. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『瀬名遺跡Ⅲ(遺物編Ⅰ)本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第47集
8. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
9. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ 鶴喰前田遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
10. 韮山町山木遺跡発掘調査団1969『山木遺跡 第二次調査概報』ニューサイエンス社
11. 財団法人かながわ考古学財団2001『原口遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告104
12. (平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により実見)
13. 観福寺北遺跡群発掘調査団1997『観福寺北遺跡群開耕地遺跡発掘調査報告書』
14. 財団法人君津郡市文化財センター1991『大井戸八木遺跡』『君津郡市文化財センター年報9-平成2年度-』
15. 財団法人君津郡市文化財センター1999『高砂遺跡Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第154集
16. 財団法人君津郡市文化財センター『文協遺跡』(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集
17. 財団法人千葉県文化財センター1999『一般国道410号埋蔵文化財調査報告書-袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡-』千葉県文化財センター調査報告書第349集
18. 米田耕之助1986『根田遺跡』『市原市文化財センター年報(昭和60年度)』(財)市原市文化財センター
19. (野澤2002)
20. (野澤2002)
21. 粕江市教育委員会1992『弁財天池遺跡』
22. 朝霞市教育委員会1997『朝霞市史普及版 あさかの歴史』
23. (野澤2002)
24. 宮島秀夫1995『銅釧・鉄釧出土の方形周溝墓 観音寺遺跡4号方形周溝墓』『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会
25. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『有馬遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第102集
26. 長野県教育委員会1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-南箕輪村その1・その2-』
27. 茅野市教育委員会1995『家下遺跡』
28. 八幡一郎1928『南佐久郡の考古學的調査』
29. 佐久市教育委員会1999『鳴沢遺跡群 五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集
30. 佐久市教育委員会1998『上直路遺跡調査報告書』『佐久市埋蔵文化財 年報6』
31. 財団法人長野県埋蔵文化財センター1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4-長野市内その1-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33
32. 長野市教育委員会1995『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集
田中正治郎1999『篠ノ井遺跡群出土の銅釧』『長野県埋蔵文化財センター紀要』7 長野県埋蔵文化財センター
33. (臼居2000)